

富ノ森城跡の調査

— 中近世集落の発見 —

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財) 京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 令和2年度調査区全景（室町時代後半 北東から）

はじめに ^{とみのもり} 富ノ森城跡は、京都市伏見区横大路六反畑および北ノ口地内に所在する平地居館跡です。周辺地形や聞き取り調査によって存在が知られた遺跡です。

京都大学人文科学研究所教授山下正男氏（昭和61年当時）は、横大路被官衆が在城した室町時代の居城跡と推定していますが、この城に関する史料が確認できないため詳細は明らかではありませんでした。令和2年度に都市計画道路（横大路淀線）の整備にあたり、山下氏が推定された城跡から北東に50mほど離れた地点で発掘調査を実施したところ、鎌倉時代から江

戸時代初頭にかけて営まれた集落跡を新たに発見しました。

立地と環境 遺跡は桂川と宇治川に挟まれた沖積地に立地しています（図1）。調査地の南東側にはかつて横大路沼や巨椋池があり、用排水路が整備された現在も、なお地下水位が高い低湿な環境下にあります。

遺跡周辺には条里地割の名残とされる碁盤目状の土地区画と「下ノ坪」などの字名が認められます。また、室町時代頃の「富森」が、当初は公家の西園寺家、後に三条西家の所領となり、人馬の徴用や年貢米などの貢納があったことを

^{かんけんき} 『管見記』の^{きんこうき} 「公名公記」や^{さねたかこうき} 『実隆公記』は記しています。

しかし、このように古来より富ノ森周辺が人々の活動の場であったことを示す痕跡がいくつか残さ



図1 調査地と周辺図



写真2 鎌倉時代の井戸（北東から）



写真3 室町時代後半から安土桃山時代の溝（南から）

れているにもかかわらず、これまで富ノ森城跡の周囲1kmにわたって他の遺跡はまったく確認できていませんでした。今回の集落の発見は、具体的な姿がよくわかっていなかった京都市南西部低湿地帯における歴史を紐解くうえで、非常に貴重な資料を私たちに提供するものとなりました。

集落形成以前 遺跡の基盤となる微高地は、砂礫や砂泥など河川の氾濫による堆積物で構成されていました。つまり鎌倉時代よりも前の時代、調査地は河川の流路内だったと考えられます。河川が埋まって微高地化したのは、堆積物

に含まれる遺物などから平安時代頃と推定しています。

鎌倉時代から室町時代前半 微高地上に人々が居住し始めたのは鎌倉時代です。屋敷地を区画する幅0.5～1.5mの溝と、掘立柱建物や井戸、墓などを確認しました。鎌倉時代の井戸は、当時の遺構面（標高約9m）から3mも掘り下げて水溜を設置しており、現在と比べて地下水位が低かったことがわかりました（写真2）。この時代の調査地は、現在よりも比較的乾燥した環境にあったと考えられます。

室町時代後半から江戸時代初頭 屋敷地を区画する幅4～5mの

溝と、掘立柱建物や柵などがあります（写真1・3）。室町時代後半の溝からは、タニシなどの淡水産貝類が多数出土しており、水が常に流れる環境に生息する珪藻（藻の仲間）の遺存体も多数見つかりました。さらに遺跡全体が洪水堆積物に覆われていました。これらは調査地周辺で低湿地化が進んだことを意味しており、こうした環境変化に対応して溝の規模を大きくしたと推定しています。しかし、安土桃山時代から江戸時代初頭にかけては洪水の痕跡が減少し、一時的な乾燥化がみられました。

江戸時代 溝や土坑などが見つかりました。溝は何度も掘削されており、幅10mを超える大規模な溝も確認しました。特に江戸時代後半以降は洪水が頻繁に起こるようになり、場所によっては約1.5mも土砂が堆積しています。当時は地下水位の上昇にともなう低湿地化が進み、水害が増加したようです。

おわりに 今回の調査では、遺跡があまり知られていなかった地域で新たに集落を発見しただけでなく、遺跡形成過程の復元から、低湿地化と乾燥を繰り返す周辺環境の歴史的推移について明らかにすることができました。残念ながら今回は土塁などの城館にともなう施設は確認できず、山下氏が指摘した富ノ森城について直接証拠立てる資料は得られませんでした。今後もさらなる調査・研究を行ない、この地域の歴史について考えていきたいと思っております。

（中谷正和）